

Covid-19禍における母性看護学実習の学生の実習満足度・到達度の関係 －臨地実習時間減少から生じた課題の分析 第1報－

上野 典子¹⁾, 大澤 豊子¹⁾, 森田 桂子¹⁾, 大野 友子¹⁾

了徳寺大学・健康保健学部・看護学科¹⁾

要旨

本研究は、Covid-19禍における母性看護学実習の学生の実習満足度・到達度の実態を知り、臨地実習時間減少から生じた課題を明らかにすることを目的とする。2020年9月から2021年3月迄に母性看護学実習を履修したA看護系大学学生90人を対象に、無記名自記式質問紙により調査し、分析対象は78名（有効回答率86.6%）であった。その結果、学内実習主体群では、臨地実習主体群に比べて相対的に学修意欲や実習満足度・到達度がやや低くなる傾向がみられ、臨地実習時間の減少したことによる影響と課題が示唆された。学内実習では、技術習得を促進し、成功体験や自己効力感を高めるよう主体的学修方法を組み立てることにより、学修成果が実感でき、実習到達度・満足度を高めることができる。

キーワード：Covid-19, 臨地実習時間, 母性看護学実習, 学内実習, 実習到達度, 満足度

Relationship between practical satisfaction and achievement of students in maternal nursing practice in the Covid-19 —Analysis of issues arising from the decrease in clinical practice time 1st report—

Noriko Ueno¹⁾, Toyoko Ohsawa¹⁾, Keiko Morita¹⁾, Tomoko Ohno¹⁾

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Abstract

The purpose of this study is to understand the actual situation of the degree of satisfaction and achievement of the students in the maternity nursing practice in Covid-19, and to clarify the problems caused by the decrease in the clinical practice time. A survey of 90 nursing university students who completed maternal nursing practice using an anonymous self-administered questionnaire from September 2020 to March 2021, and analyzed 78 subjects (valid response rate 86.6%).

As a result, the on-campus practice -based group tended to have a slightly lower learning motivation, level of satisfaction, and achievement level than the clinical practice -based group, suggesting the impact and issues of the decrease in clinical practice time. A decrease in clinical practice time may affect the achievement level, and the problems to be solved and the countermeasures were suggested in the teaching method mainly for on-campus practice. In on-campus practice, we will formulate independent learning methods to promote skill acquisition and enhance successful experiences and self-efficacy.

Resulting in the learning outcomes and improve the degree of achievement and satisfaction of the practice.

Keyword : Covid-19, On-site practice time, Maternity nursing practice, On-campus practice, Achievement level,

I. はじめに

看護基礎教育において臨地実習は、学生が対象の看護の必要性や健康課題を見出し、それに応じた援助・支援を実践することで、既習知識や技術の統合がなされ、実践能力および問題解決能力が養われていく学修の場である。2018年に看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーが「Ⅰ群：対象となる人を全人的に捉える基本能力、Ⅱ群：ヒューマンケアの基本に関する実践能力、Ⅲ群：根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、Ⅳ群：特定の健康課題に対応する実践能力、Ⅴ群：多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力」¹⁾と示され、特にⅣ群の「14. 健康の保持増進と疾病を予防する能力」を修得する学修の場として、母性看護学実習のもつ意義は大きい。学生の卒業時の到達目標には「(1)健康の保持増進、疾病予防のために必要な看護援助方法を指導のもとに実施できる(2)人の誕生から死に至るまでを生涯発達の視点から理解し、各発達段階における健康の保持増進、疾病予防のために必要な看護援助方法を指導のもとに実施できる(3)妊娠・出産・育児期の母児（子）とその家族の健康を保持増進するために必要な看護援助方法を指導のもとに実施できる」²⁾とあり、臨地実習は学生へ多くの経験的学修の機会を与えており、重要である。

しかし、2020年度はCovid-19の感染蔓延を背景に、医療提供体制の維持及び感染防止対策の観点から、看護学生の実習受け入れが困難となった病院（施設）があり、臨地実習の延期または中止等を余儀なくされた。このような状況から、A看護系大学では母性看護学実習における実習方法を、部分的に臨地実習主体から学内実習主体とする方法へとフレキシブルに変更し、対応した。その結果、学生によっては臨地実習時間減少が生じたため、Covid-19禍における母性看護学実習の学修成果に影響がないか、早急に評価する必要性が生じた。

そこで、本研究は2020年度母性看護学実習を履修した学生90人を対象に、実習満足度・到達度の実態を知り、臨地実習時間減少から生じた母性看護学実習の課題を明らかにすることを目的として調査を行った。本稿では、第1報として臨地実習時間減少から生じた課題の分析をしたので報告する。

II. 研究目的

Covid-19禍における母性看護学実習の学生の实習満足度・到達度の実態を知り、臨地実習時間減少から生じた母性看護学実習の課題を明らかにする。

III. 用語の定義

本研究で使用する用語については、文献を参考に以下のように定義した。

実習満足度：看護学実習における満足感の程度であり、満足感は学修体験のプロセスあるいは結果に満足する気持ち³⁾である。

学修意欲：看護学生が自発的、能動的に学修しようとする欲求や意思のこと⁴⁾で、学生自身の「積極的に学修しよう」という思いである。

学修成果：看護学実習の学修活動の結果、看護学生自身が獲得できたと評価する成果のことである。この学修成果には、知識（認知的領域）、技術（精神運動的領域）、態度（情意的領域）の側面がある⁵⁾。

Ⅳ. 母性看護学科目の概要と「母性看護学実習」の展開および学修内容

1. 母性看護学科目の概要

2年次に「母性看護学概論」1単位30時間, 3年前期に「母性看護学方法論」2単位60時間の講義・演習（看護過程演習および学内実習）, 3年後期に「母性看護学実習」2単位90時間を展開している。このうち講義・演習では, 母性やジェンダーおよびリプロダクティブヘルス/ライツの概念や女性のライフサイクルにおける健康課題とその看護, 妊婦・産婦・褥婦および新生児の身体・心理・社会的特徴とその看護に関する知識や技術, 倫理観を学ぶ。さらに実習では, 修得した知識や看護技術を使って指導のもとに必要な看護を行う基礎的な実践能力を養うことを目指している。

Covid-19禍において本学では, 3年前期の「母性看護学方法論」はオンライン授業による対応となった。本来であれば母性看護に必要な技術の修得と学修の深化を図る目的で15時間の学内実習を行う予定であったが, 感染防止の観点から実施できず, DVD視聴を活用したシミュレーション演習（オンライン演習）へと変更した。母性看護に必要なアセスメント能力や周産期の健康課題を解決する能力および倫理観を養えるように内容を一部変更し, オンライン授業を展開した。

2. 母性看護学実習の展開および学修内容

本学の「母性看護学実習」は本来2週間で, 臨地実習8日, 学内実習2日の合計10日間が実習期間である。初日は学内実習で, オリエンテーションと母性看護技術演習を行う。2日目からは実習施設は7病院と2つの助産院で展開し, 最終日は学内実習で学びの共有のためにカンファレンスを行う。Covid-19の感染蔓延を背景に, 急遽実習受け入れ中止となった病院が相次いだため, 一部の臨地実習を学内実習や他実習施設への臨地実習に切り替えて実施した。母性看護学実習の展開は図1に示すように, 約半数の学生の臨地実習時間が減少し, 臨地実習主体群と学内実習主体群に分かれた。

母性看護学実習の目的は, 「母性看護の対象（妊婦・産婦・褥婦・新生児とその家族）の特性を理解し, 母子ともに健康に過ごせるように, 母子とその家族に対する看護の基礎的な実践能力を養う」である。実習目標を表1に示す。これらの実習目的・目標を臨地実習時間が減少しても達成できるよう, 学内実習を効果的に活用し, 短期間の臨地実習では経験できないと予測される学修内容をシミュレーション演習等で補完する方法を検討した。結果として, 学内実習を活用して臨地実習の内容をカバーし, 表2のように母性看護学実習の学修内容を網羅できるように学修展開した。

本来の母性看護学実習の展開

	初日	1週目	2週目	
Aパターン	学内実習 (オリエンテーション)	病院実習 (4日間)	病院実習 (4日間)	
Bパターン		病院実習 (4日間)	助産所実習 (4日間)	
Cパターン		助産所実習 (4日間)	病院実習 (4日間)	



Covid-19禍における母性看護学実習の展開

		初日	1週目	2週目	
臨地実習主体群	Aパターン	学内実習 (オリエンテーション)	病院実習 (4日間)	病院実習 (4日間)	
	Bパターン		病院実習 (4日間)	助産所実習 (4日間)	
	Cパターン		助産所実習 (4日間)	病院実習 (4日間)	
学内実習主体群	Dパターン	学内実習 (オリエンテーション)	学内実習 (4日間)	助産所実習 (4日間)	
	Eパターン		学内実習 (4日間)	クリニック1日と 助産所実習1日	学内実習
	Fパターン		学内実習 (4日間)	病院実習2日	学内実習

図1 Covid-19禍における母性看護学実習展開の変化

表1 母性看護学実習の実習目標

1. 妊婦と胎児の健康状態を理解し、妊娠が正常に経過していることが理解できる。
2. 分娩各期の経過から産婦の特徴を理解し、必要な看護がわかる。
3. 褥婦が回復し、心身の変化に適応していく過程を理解し、必要な看護がわかる。
4. 新生児が胎外生活に適応していく過程が理解できる。
5. 退院に向けて諸条件を整え、家族を含めた指導の必要性が理解できる。
6. 地域における母子保健活動と医療チームの連携について理解できる。
7. 生命の尊厳について学びを深めることができる。

表2 母性看護学実習の学修内容と臨地実習および学内実習の実習方法

母性看護学実習の学修内容	臨地実習における実習方法	学内実習における実習方法
<p>【妊娠期の看護】 正常な妊娠経過および胎児の発育状態、妊婦の健康診査、妊婦の身体的・心理的・社会的特徴の把握、妊娠各期の保健指導</p> <p>【分娩期の看護】 分娩第1期の産婦及び胎児の健康状態の観察、陣痛の間歇・発作時間・見心音の測定、分泌物の観察、補助動作（呼吸法やマッサージ）、分娩進行を促進する援助、分娩第2期の観察と分娩立ち会い、出生児の処置と全身状態の観察、胎盤娩出後の子宮底の高さや硬さ、胎盤の観察・計測、分娩後帰室までの産婦の観察</p> <p>【産褥期の看護】 産褥期に必要な健康診査（退行性変化、進行性変化の観察）と援助、愛着への支援、心理的变化の観察、育児技術習得への援助、産褥期に必要な保健指導（授乳指導、母児同室指導、沐浴指導、調乳指導、退院指導）</p> <p>【新生児期の看護】 出生直後の新生児の観察・計測、新生児の年齢に応じた生理的变化の理解と援助、新生児のバイタルサイン測定と健康診査、栄養の補給（授乳と状態観察、母乳栄養支援）、新生児の排泄への援助（排尿・排便の回数、性状の観察、おむつ交換）、清潔への援助（清拭、沐浴）新生児室での外傷・事故防止と環境調整</p> <p>【母子保健活動】 地域における社会資源の種類と活用、地域における母子保健活動と医療チームの連携</p> <p>【生命の尊厳と倫理】 生殖補助医療（ART）、不妊治療、人工妊娠中絶、生命倫理など</p>	<p>1. 外来における妊婦健診・保健指導の見学または指導者のもとで一部経験実施する</p> <p>2. 分娩第1期の看護（産婦・胎児の健康状態観察含む）を指導者のもとで一部実践する。</p> <p>3. 出産場面に立ち会い、喜びを共感する。</p> <p>4. 指導者のもとで胎盤の観察・計測、分娩後帰室までの産婦の観察を実施する</p> <p>5. 褥婦の健康診査に基づいた回復促進の援助を指導者のもとで一部実践または見学する</p> <p>6. 産褥期の看護（母児早期接触、授乳指導、母児同室指導、沐浴指導、調乳指導、退院指導など）を見学する</p> <p>7. 8. 新生児期の看護（バイタルサイン測定と健康状態観察、沐浴・清拭・オムツ交換・あやし方・哺乳介補・安全管理など）を指導者のもとで一部実践または見学する</p> <p>9. 地域における母子保健活動（産後ケア、家庭訪問、両親学級、食育教室、骨盤ケア、母乳外来、乳房ケア、育児相談等）の実際を見学または参加する</p> <p>10. 医療チームカンファレンスに参加する</p>	<p>1. 事例について、シミュレーターを活用した妊婦健康診査を行う</p> <p>2. 分娩期の看護のDVD視聴、分娩の模擬体験を行う、</p> <p>3. 「生まれる」DVD視聴（生命の神秘と誕生の奇跡、虐待を受けた私が家庭をもち出産することの意味）</p> <p>4. 模擬胎盤の観察・計測を行う</p> <p>5. 事例について、シミュレーターを活用した褥婦の健康診査を行い、報告する。</p> <p>6. 新生児モデル・乳房モデルを活用して、授乳姿勢とラッチオンを模擬体験する</p> <p>7. 事例について、シミュレーターを活用した新生児のバイタルサイン測定と健康診査およびその報告を実施する</p> <p>8. 新生児モデルを活用して、沐浴・オムツ交換・あやし方・哺乳介補を実施する</p> <p>9. 「地域における母子保健活動と医療チームの連携」カンファレンスによるディスカッション</p> <p>10. 「生まれる」DVD視聴（死産の悲しみを乗り越えて、障害をもって生まれ生きること）、カンファレンスによるディスカッション</p>

V. 研究方法

1. 調査対象者

2020年9月から2021年3月迄に母性看護学実習を履修したA大学看護学科学生90名。

2. 調査期間

質問紙による調査期間は2021年7月。

3. 調査内容およびデータ収集方法

質問紙の内容として、基本属性は性別、臨地実習実日数、学内実習実日数、実習施設名とした。実習評価に関連する項目は「母性看護学実習に対する意欲」「実習目的・目標の理解度」「実習目的・目標の達成度」「母性看護学実習に対する満足度」等の12項目を独自に作成した。「大変そう思う」5点から「全くそう思わない」1点の5件法を用いた。また、母性看護学実習の課題を明らかにする目的から「学内実習で一番印象に残ったこと」と「臨地実習で一番印象に残ったこと」を自由記載形式の回答とした。

データ収集方法は、無記名自記式質問紙とし、分担研究者から配布した。回収方法は留め置き法として調査対象者が回答用紙回収Boxに投函する方法にて回収した。「私は、標記の研究調査に同意し、協力します」のチェックボックスへのチェックと回答用紙の投函の両者を以て同意を得たものとした。

4. 分析方法

本研究の分析については統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 27を用いた。学生による母性看護学実習の評価と認識を把握するために、各項目の平均値と標準偏差を算出し、Shapiro-Wilk検定でデータ分布の正規性を確認した。臨地実習実日数5日以上を臨地実習主体群、5日未満を学内実習主体群の2群に分けて、Mann-WhitneyのU検定を行い分析した。また、臨地実習主体群と学内実習主体群別の学生の実習評価に関連する項目の相関をみるため、Spearmanの順位相関係数を其々求め分析した。

5. 倫理的配慮

本研究は了徳寺大学の倫理審査委員会の承認（承認番号21-14）を得た。関係の学科長には研究趣旨や研究方法について書面および口頭で説明し、同意を得たのち実施した。研究対象となる学生へは、質問紙配布の際に、研究目的、概要、自由意志による参加、途中での参加辞退が可能であること、匿名性の確保、成績への影響はないこと、学会や論文による発表について、文書と口頭で説明した。

VI. 結果

質問紙は配布数90件中80名（回収率88.9%）の回答を得た。回答が得られた質問紙のうち、全回答が得られた78名（有効回答率86.7%）を分析対象とした。

1. 研究対象者の属性

研究対象者の属性については表3に示す。分析対象78名のうち、男性8名（10.3%）、女性70名（89.7%）であった。臨地実習実日数の平均は 4.97 ± 2.77 日であり、臨地実習実日数は図2に示す。

表3 研究対象者の属性 (n=78)

		n = 78	
属性	種別	度数	%
性別	男性	8	10.3
	女性	70	89.7
病院実習別	A病院	14	17.9
	B病院	9	11.5
	C病院	4	5.1
	D病院	5	6.4
	E病院	9	11.5
	F病院	23	29.5
	G病院	4	5.1
	病院実習なし	10	12.8
助産院実習別	H助産院	17	21.8
	I 助産院	23	29.5
	助産院実習なし	38	48.7

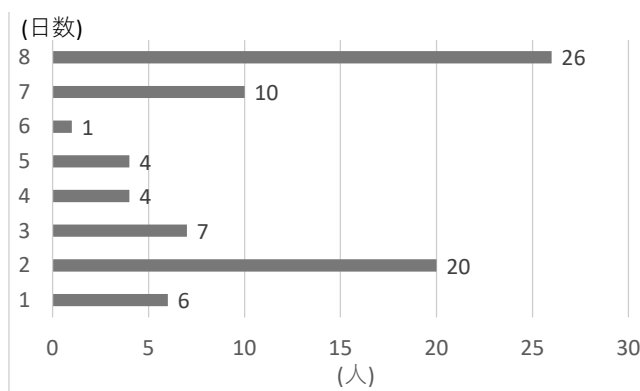


図2 臨地実習実日数 (n=78)

2. 臨地実習主体群と学内実習主体群の学生による実習評価の違い

5日以上の実地実習実日数群を臨地実習主体群とし、5日未満群を学内実習主体群として2群に分けて、各群の学生による実習評価の平均を求めた。さらに、臨地実習主体群と学内実習主体群の実習評価の中央値の差をMann-WhitneyのU検定で分析した結果を表4に示す。有意差があったものは、「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」「2実習目的・目標は理解できた」「3総合的に実習目的・目標は達成できた」「11この実習で分娩時の看護を経験できた」「12この実習は総合的に満足できた」であった。

表4 臨地実習主体群と学内実習主体群の学生による実習評価の違い (n=78)

学生の実習評価項目		mean ± SD	p
1 母性看護学実習に意欲的に取り組んだ	臨地実習主体群	4.66 ± 0.48	*]
	学内実習主体群	4.32 ± 0.784	
2 実習目的・目標は理解できた	臨地実習主体群	4.56 ± 0.594	*]
	学内実習主体群	4.27 ± 0.652	
3 総合的に実習目的・目標は達成できた	臨地実習主体群	4.39 ± 0.586	*]
	学内実習主体群	3.92 ± 0.759	
4 教員の指導や助言は適切だった	臨地実習主体群	4.66 ± 0.53	ns
	学内実習主体群	4.51 ± 0.731	
5 指導者の指導や助言は適切だった	臨地実習主体群	4.07 ± 0.848	ns
	学内実習主体群	4.3 ± 0.996	
6 指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった	臨地実習主体群	4.51 ± 0.553	ns
	学内実習主体群	4.51 ± 0.731	
7 事前学習は実習に役立った	臨地実習主体群	4.27 ± 0.742	ns
	学内実習主体群	4.05 ± 1.12	
8 学内実習(技術練習)は役立った	臨地実習主体群	4.56 ± 0.70	ns
	学内実習主体群	4.46 ± 0.691	
9 カンファレンスは実習内容の理解に効果があった	臨地実習主体群	4.17 ± 0.863	ns
	学内実習主体群	4.08 ± 0.829	
10 母性看護学実習は意義のあるものだった	臨地実習主体群	4.66 ± 0.575	ns
	学内実習主体群	4.43 ± 0.647	
11 この実習で分娩時の看護を経験できた	臨地実習主体群	3.49 ± 1.63	*]
	学内実習主体群	2.3 ± 1.525	
12 この実習は総合的に満足できた	臨地実習主体群	4.61 ± 0.542	*]
	学内実習主体群	4.19 ± 0.776	

Mann-WhitneyのU検定 ns=not significant * p<.05

3. 臨地実習主体群と学内実習主体群の学生による実習評価項目の相関

臨地実習主体群と学内実習主体群別の其々の学生による実習評価項目の相関をみるため、Spearmanの順位相関係数を表5、表6に示す。

臨地実習主体群において、臨地実習実日数と相関を示す項目は1つも認めなかった。次に「3総合的に実習目的・目標は達成できた」と中等度相関を示した項目は、「2実習目的・目標は理解できた」($r_s = .574$)と「9カンファレンスは実習内容の理解に効果があった」($r_s = .479$)であった。カンファレンスを活用した学生の学びの共有は臨地実習実日数および経験の少ない学内実習主体群にとっても臨地実習主体群にとっても大変重要な学修の場である。また、「12この実習は総合的に満足できた」と中等度相関を示した項目は、「4教員の指導や助言は適切だった」($r_s = .481$)と、「9カンファレンスは実習内容の理解に効果があった」($r_s = .467$)、「10母性看護学実習は意義のあるものだった」($r_s = .414$)、「11この実習で分娩時の看護を経験できた」($r_s = .478$)であった。

表5. 臨地実習主体群における臨地実習実日数と学生による実習評価項目の相関

	学生による実習評価項目											
	臨地実習実日数	1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ	2実習目的・目標は理解できた	3総合的に実習目的・目標は達成できた	4教員の指導や助言は適切だった	5指導者の指導や助言は適切だった	6指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった	7事前学習は実習に役立った	8学内実習(技術練習)は役立った	9カンファレンスは実習内容の理解に効果があった	10母性看護学実習は意義のあるものだった	11この実習で分娩時の看護を経験できた
1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ	0.115											
2実習目的・目標は理解できた	0.059	.561**										
3総合的に実習目的・目標は達成できた	-0.024	0.224	.574**									
4教員の指導や助言は適切だった	-0.135	.370*	.484**	0.259								
5指導者の指導や助言は適切だった	-0.031	0.151	0.153	0.078	0.198							
6指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった	0.154	0.281	.482**	0.279	.492**	.587**						
7事前学習は実習に役立った	-0.083	0.179	.386*	.341*	0.23	0.216	0.269					
8学内実習(技術練習)は役立った	-0.226	0.216	.492**	0.276	.423**	0.183	.326*	.628**				
9カンファレンスは実習内容の理解に効果があった	-0.272	.383*	.448**	.479**	.340*	0.196	0.228	0.254	.363*			
10母性看護学実習は意義のあるものだった	0.066	.427**	.454**	0.249	.444**	.316*	.551**	0.28	.400**	.421**		
11この実習で分娩時の看護を経験できた	0.049	0.21	0.299	0.132	0.205	0.124	0.275	0.063	0.145	0.229	0.263	
12この実習は総合的に満足できた	-0.179	.323*	.343*	0.285	.481**	.326*	.337*	0.179	0.246	.467**	.414**	.478**

Spearmanの順位相関係数 * $p < .05$ ** $p < .01$

学内実習主体群において、臨地実習実日数と「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」間($r_s = -.339$)に負の弱い相関を示した。次に「3総合的に実習目的・目標は達成できた」と中等度相関を示した項目は、「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」($r_s = .436$)と、「2実習目的・目標は理解できた」($r_s = .568$)であった。また、「12この実習は総合的に満足できた」と中等度相関を示した項目は、「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」($r_s = .471$)と「9カンファレンスは実習内容の理解に効果があった」($r_s = .467$)、「8

学内実習（技術練習）は役だった」(rS=.409), 「10母性看護学実習は意義のあるものだった」(rS=.498), 「11この実習で分娩時の看護を経験できた」(rS=.443), 「4教員の指導助言の適切性」(rS=.583), 「6学生の自主性の尊重」(rS=.551), であった。特に「5指導者の指導助言の適切性」と「12この実習は総合的に満足できた」間 (rS=.683) には, 強い相関を認め, 教員・指導者の指導・助言の適切性は実習満足度に影響することが示唆された。また, 「6学生の自主性の尊重」と強い相関を示した項目は「4教員の指導助言の適切性」(rS=.711) と, 「5指導者の指導助言の適切性」(rS=.763) であった。

その他, 「10母性看護学実習は意義のあるものだった」と「8学内実習（技術練習）は役だった」間 (rS=.825) に非常に強い相関を認め, 「7事前学習は役だった」間 (rS=.588) にも中等度相関を認めた。

表6. 学内実習主体群における臨地実習実日数と学生による実習評価項目の相関

n = 37

	学生による実習評価項目											
	1 母性看護学実習に意欲的に取り組んだ	2 実習目的・目標は理解できた	3 総合的に実習目的・目標は達成できた	4 教員の指導や助言は適切だった	5 指導者の指導や助言は適切だった	6 指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった	7 事前学習は実習に役立った	8 学内実習（技術練習）は役立った	9 カンファレンスは実習内容の理解に効果があった	10 母性看護学実習は意義のあるものだった	11 この実習で分娩時の看護を経験できた	
1 母性看護学実習に意欲的に取り組んだ	-.339*											
2 実習目的・目標は理解できた	-0.166	.416*										
3 総合的に実習目的・目標は達成できた	-0.079	.436**	.568**									
4 教員の指導や助言は適切だった	-0.042	0.244	0.136	0.129								
5 指導者の指導や助言は適切だった	0.062	.384*	0.039	0.196	.792**							
6 指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった	0.115	0.129	0.059	0.284	.711**	.763**						
7 事前学習は実習に役立った	0.31	0.302	.363*	0.213	.326*	.338*	.329*					
8 学内実習（技術練習）は役立った	0.247	0.289	0.23	0.11	0.234	0.254	0.225	.624**				
9 カンファレンスは実習内容の理解に効果があった	0.154	0.04	0.205	0.063	0.242	0.213	0.288	.339*	.478**			
10 母性看護学実習は意義のあるものだった	0.272	.355*	0.193	0.312	.367*	.465**	.507**	.588**	.825**	.499**		
11 この実習で分娩時の看護を経験できた	0.161	0.138	0.227	0.238	.364*	0.273	0.256	.380*	0.257	0.257	.344*	
12 この実習は総合的に満足できた	-0.15	.471**	0.161	0.3	.583**	.683**	.551**	.365*	.409*	.383*	.498**	.443**

Spearmanの順位相関係数 * p<.05 ** p<.01

4. 母性看護学実習で学生が一番印象に残ったこと

学生へ自由記載してもらった「母性看護学実習で一番印象に残ったこと」を学内実習で一番印象に残ったことと臨地実習で一番印象に残ったことに分けて, 表7に示す。全部で187 (学内実習 n = 102, 臨地実習 n = 85) の回答が得られた。

学内実習では新生児の沐浴, 技術練習, シミュレーター使用による技術練習の回答が多かった。臨地実習では分娩の模擬体験, 分娩の立ち会い, 母性看護の実践体験, 対象者との関わりの回答が多かった。

表7 母性看護学実習で一番印象に残ったこと

学内実習で一番印象に残ったこと (n=102)		臨床実習で一番印象に残ったこと (n=85)	
カテゴリ	回答数	カテゴリ	回答数
妊婦の健康診査	6	分娩模擬体験	7
妊婦の健康診査	8	分娩 (出産) への立ち合い	19
新生児のバイタルサイン測定・健康診査	9	母性看護対象者との関わり	6
新生児の沐浴	31	新生児・乳児の看護	7
母親体験・母親役割の実感	4	新生児のイメージ	4
新生児のバイタルサイン測定	9	生命の誕生 (喜び)	2
シミュレーターを使った技術演習	10	保健指導	3
技術練習	15	母性看護の実践体験	15
成功体験・自己効力感	7	開業助産師の話	5
カンファレンス・学びの共有	2	生命倫理・生命の尊厳	3
DVD視聴・映像教材効果	2	学びの共有	3
		その他	7

「レオポルド触診法」(4) 「妊婦・褥婦の健康診査を自分たちで行い、それについてアセスメントした事」 「妊婦健康診査を実践した」

「褥婦の観察」(7) 「褥婦の観察で子宮底を触ったこと」 「褥婦の健康診査を自分たちで行い、それについてアセスメントした事」

「妊婦健康診査・新生児の健康診査」(4) 「妊婦・産婦・褥婦と新生児の観察」

沐浴 (16), 沐浴の技術練習を行ったこと (10), 「学内実習の沐浴がリアルだった」(2) 「沐浴が大変なんだと実感した」(2) 「沐浴の技術練習が役に立って楽しかったです」

「赤ちゃんモデルと乳房モデルで、授乳の仕方やラッチオンを経験できた」 「母親役割をすることで授乳が大変な母親の気持ちがよく分かった」 「授乳姿勢について、実際に乳房モデルと枕を使って実践した事」 「世の中の母たちはこんなにも大変なんだと実感した」

「新生児のバイタルサイン測定」

「リアルなモデルを使い、妊産褥婦・新生児を観察したこと」(3) 「シミュレーターを使って体験でき、じっくりと技術をつかめた」(3)

「技術練習」(9) 「学内にてしっかり看護実践をじっくり行えた」 「看護など実際に練習できてよかった」 「母性看護技術の練習 (手順・方法とその意味がわかりやすかった)」 「技術練習して、病院でもスムーズに観察できることにつながった」

「技術練習をしっかりと行い、臨床で役に立った」 2 「学内で行った技術を臨床で行う場面があり役に立った」 「各期に合わせた観察を学べたのが実習に役立った」 「臨床実習前に体験し、イメージをつくることでよかった」 「事前の演習で臨床実習前に学びが補足できた」 「知識がついた」

「他グループとカンファを行ったためお互いの異なった学びを知ることができた」 「他の臨床の学びを共有できた」

「ビデオや資料を通し、赤ちゃん、褥婦への看護を学べた」 「DVDで産まれてくる予定の子の死を母・父が受け入れて乗り越えるためにどんな援助ができるかが、印象に残っています」

「分娩体験をさせていただき、体位など実際に体験した」(5) 「分娩時の体制がフリースタイルであったため、四つん這いになってみたりして、分娩の様子や人形を用いた児の回旋を理解する事ができた」 「実際に出産の体験をすることができました、分娩を実際に行為しながらできたことが、より知識として深まった」

「分娩立ち合い」(7) 「出産、感動しました」(3) 「出産に立ち会えたこと」(3) 「分娩を直接見ることができた事」 「出産現場、難産で圧迫や吸引による出産は緊張した」

「母と児の両方を受け持たせて頂き、4日間を通じて母児と関わる事ができた」 「2週間健康診査の実際や不妊治療で悩んでいる方との関わりが印象に残った」 「担当産婦さんの入院から出産まで間近で見れたこと」 「帝王切開の褥婦を受け持ち、分娩から退院まで関わる事ができたこと」 「お母さんとお話させていただいたこと」

「生後1時間の新生児の看護に立ちあう事ができた。」 「乳児健診に入らせてもらったこと」 「黄疸や授乳の援助を一緒に見られた事」 「新生児の検温と沐浴の実施」(2) 「新生児の出生直後のバイタルやアプガースコアの評価を見ることができた」

「実際の赤ちゃんを見る事が出来て、個性を感じた」 「新生児がイメージしてたよりも人間味があった」 「生まれたばかりの新生児を見れたこと」(2)

「分娩の付き添いから出産まで見届けられる事ができ、生命の誕生に喜びを感じた」

「母親学級への参加」 「助産院に実際に健診に来ている妊婦さんとお話できて、食事について知ることができた」 「退院指導を実施し、褥婦から感謝されたこと。」

「実際に新生児と褥婦さんに触れ合っってバイタル、全身観察をし、実践したこと」(3) 「実際に新生児の沐浴やバイタルサイン測定を行えたこと」(3) 「新生児の身体測定、胎盤の測定」(3) 「レオポルド触診法で胎向がわかるようになったこと」 「妊婦健診を経験できたこと」 「分娩促進のため足浴を実施したこと」 「授乳の様子や乳管開通法や乳房観察など実践したこと」

「フリースタイル分娩や分娩時に母体に負担がかからないような取り組みをしていることが印象に残った」 「無痛分娩が一概には良いと言えないことを説明してくださったこと」 「助産院ならではの分娩の方法を知ることができたこと」

「死産があったこと」 「難産で児の危篤があり、緊張した」

「カンファレンスで共有し、少ない実習でも色々なことを学ぶことができた」 「学びをメンバーと共有したこと」

「褥婦・新生児への家庭訪問」(2) 「実際に胎盤を見る事ができたこと」(2) 「開業助産師の活力がすごかった、パワーをもらった」(2)

Ⅶ. 考察

1. 臨地実習主体群と学内実習主体群の学生による実習評価の違い

臨地実習実日数5日以上を臨地実習主体群、5日未満を学内実習主体群の2群に分けて、学生による実習評価の違いを分析したところ、「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」「3総合的に実習目的・目標は達成できた」「11この実習で分娩時の看護を経験できた」「12この実習は総合的に満足できた」に有意差が認められた ($p < .05$)。この結果より、学内実習主体群では、臨地実習主体群に比べて相対的に学修意欲や実習満足度・到達度がやや低くなる傾向がみられ、臨地実習時間の減少したことによる影響と課題が示唆された。

本来であれば臨地実習で経験可能であった学修内容を補うために、シミュレーターを活用した妊婦・褥婦・新生児の健康診査や分娩期の看護のDVD視聴等、学内実習の充実を図るために様々な方策を講じたが、これには限界があり、さらなる改善の余地があることを示している。劇的で感動的な出産の場面や愛着形成の場面に寄り添い、五感をつかって日々めまぐるしく変化する母児の身体的・心理的状态を観察するなど、看護学生として母児と関わり、相互作用の中から体感して得られるダイナミックな学修⁶⁾は、臨地実習でしか学べないものであろう。そこで学内実習では、臨場感のある模擬患者が登場するシミュレーション教育とし、基本的なコミュニケーション能力や既習知識を活用して観察する力を培い、臨地実習の学修成果を最大に引き出せるように準備する必要があると考える。

また、臨地実習実日数以外に、学修意欲や実習満足度・到達度に影響を与えている交絡因子があることが推測されるが、統計的に重回帰分析を行うことができず限界があり、その因子を特定するに至らなかった。

2. 臨地実習実日数と学生による実習評価項目の関連

臨地実習主体群において、臨地実習実日数と相関を示す項目を1つも認めなかった。しかし、学内実習主体群においては臨地実習実日数と「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」間に負の弱い相関を示したことから、臨地実習時間が4日以下の減少レベルに至ると、学修意欲低下との関連が推測できる。そこで、学内実習主体群に対して教員は、学修意欲を高めるような学修の動機づけをするとともに、学修意欲との相関を示す「2実習目的・目標は理解できた」($rS = .574$)を実習初日から促進することで学修意欲につながると考える。また、学修意欲低下は実習満足度・到達度にネガティブに関連することが推測され、ポジティブに転換する必要がある。

実習満足度に関連する項目に「4教員の指導や助言は適切であった」($rS = .583$)と、「5指導者の指導や助言は適切であった」($rS = .683$)、「6指導者・教員は学生の自主性を尊重して関わった」($rS = .551$)があり、教員・指導者の指導助言の適切性と学生の自主性の尊重は実習満足度に大いに関連することが示唆された。また、実習満足度に関連する項目に「8学内実習(技術練習)は役だった」($rS = .409$)と、「10母性看護学実習は意義のあるものだった」($rS = .498$)、「11この実習で分娩時の看護を経験できた」($rS = .443$)がある。分娩時の看護の経験のように臨地実習でしか経験できないものもある。

学生の一番印象に残った事に「分娩の付き添いから出産まで見届ける事ができ、生命の誕生に喜びを感じた」「出産、感動しました」や「実際の赤ちゃんを見る事が出来て、個性を感じた」など、学生は受け持ち対象との相互作用を通じて、豊かな感性を育てる貴重な経験をしていることも示唆された。

安酸⁷⁾は経験型実習教育について、学修者自ら意味づける〈経験〉は、専門職が成長し続ける土台になるため、看護教員ができることは、学生のリアルな体験つまり、直接的経験に目を向けていくことで、学

生がありのまま感じたことを語れることを保証する環境づくりを重要視している。臨地実習にて豊かな感性を育てる貴重な経験をするとともに、学生自身が主体的に働きかけて、その経験を振り返り、今までの概念や価値観が更新されたときである。学生自身が主体的に働きかけて、はじめて真の経験となると考える。学生が一番印象に残った事に「カンファレンスで共有し、少ない実習でも色々なことを学ぶことができた」とあるように、カンファレンスは経験の振り返りの絶好のチャンスであると考えられる。臨地実習時間減少によって母性看護学実習への意義を充分知覚できぬままに実習プロセスを終えてしまう可能性もあり、母性看護学実習の意義を知覚させるためには、主体的な経験の意味づけが重要である。

母性看護学実習以前の講義・演習の段階から、学修内容を臨地の事象や看護実践に結びつけてイメージする思考パターンを育むことは実習の意義や経験の意味づけを知覚させるために有効であると考えられる。また、既習学修の知識や経験を活かしながら母性看護学実習の実習目標を達成できるように、既習知識・経験と実習とのつながりをより強化するような働きかけは実習の意義を知覚させ、実習到達度を高めるために有効であると考えられる。

3. 実習到達度・満足度を高めるための方策

学内実習主体群において実習到達度は「1母性看護学実習に意欲的に取り組んだ」との間に中等度相関($rS=.436$)を示しており、意欲の程度が実習到達度にかかなりの影響を与えることが示唆された。実習到達度と学修意欲は密接に関連すること⁸⁾が知られており、学修は学修者が主体的に行う行為であり、その成功には学修者の学修意欲が不可欠である⁹⁾と述べている。またKeller.J.¹⁰⁾は、学修意欲は学習活動や学修成果とそれに伴う心理的満足感と関連する、と述べている。教員がなすべきは、学修に必要な環境を適切に整え、学修意欲および実習満足度を向上させ、母性看護学実習における到達度を高めることであると考えられる。学修者の意欲を高める方法の手段として、実習意義を知覚させるよう事前準備が有用であると考えられる。そのため、臨地実習前段階よりレディネスを整える必要があり、臨地実習よりも先に学内実習で母性看護学実習の目的・目標および実習意義を十分に理解させてレディネスを整え、学修者の意欲を高めた上で、臨地実習へ臨む順序が効果的と考えられる。

さらに学内実習で学生が一番印象に残っていることの中に、「学内にてしっかり看護実践をじっくり行えた」「技術練習をしっかり行え、臨地で役に立った」などがあり、学生は技術練習を反復行った結果、技術習得につながるポジティブな経験を味わっている。また、「学内で行った技術を臨地で行う場面があり役に立った」「各期に合わせた観察を学べたのが実習に役立った」など、学内実習が臨地実習に役立ち、成功体験や自己効力感につながる経験が散見されることから、実習満足度に影響を与える教員の指導・助言とは、学生へ成功体験や自己効力感につながる経験をもたらし、また、技術習得した実感を知覚させることであると考えられる。学内実習では、技術習得を促進するように、成功体験や自己効力感を高めるよう主体的学修方法を組み立てることにより、学修成果が実感でき、実習到達度・満足度を高めることができると考えられる。

4. 学修成果を高める有効な対策

学修成果を高める有効な方略の一形態として、能動的学習法、アクティブラーニングがある。実習型科目のアクティブラーニングには、problem-based learning (PBL) やteam-based learning (TBL) を取り入れたsmall group discussion(SGD)、シミュレーション教育、フィールドワーク、ロールプレイなど、多くの方略が開発され、応用されている¹¹⁾。本学の学内実習においてもsmall group discussion(SGD)やシミュレーション教育、ロールプレイなどのアクティブラーニングをとりいれており、学生が一番印象に残って

いることへの回答に示されるように、一定の学修成果が認められている。母性看護学教育において、TBL¹²⁾のシステムをとり入れたアクティブラーニングや看護OSCE¹³⁾の活用は、学修理解の向上、学修意欲の向上、実践の場のイメージの向上、技術習得等に有用であることが報告されている。今後もさらに学修成果を高めるために、学内実習の改良に努めていきたい。

Ⅷ. 結論

1. 学内実習主体群では、臨地実習主体群に比べて相対的に学修意欲や実習満足度・到達度がやや低くなる傾向がみられ、臨地実習時間の減少したことによる影響と課題が示唆された。
2. カンファレンスは臨地実習の経験を振り返る絶好のチャンスであり、学修者の成長のためには、主体的な経験の意味づけが重要である。
3. 先に学内実習で実習の目的・目標および実習意義を十分に理解させてレディネスを整え、学修者の意欲を高めた上で、臨地実習へ臨む順序が効果的と考えられた。
4. 学内実習では、技術習得を促進し、成功体験や自己効力感を高めるよう主体的学修方法を組み立てることにより、学修成果が実感でき、実習到達度・満足度を高めることができる。

Ⅸ. 本研究の限界と課題

本研究はCovid-19禍における特別な状況のもとで、臨地実習時間減少から生じた課題に焦点をあてて明らかにした。しかし、臨地実習時間減少だけでなく、前期の母性看護学方法論がオンライン授業となり、母性看護技術演習が十分に行えなかったことも前例にない状況であり、母性看護学実習の学修成果に影響があったことと推測でき、一般化するには限界がある。今後の課題は、臨地実習が少ない中でも、学修成果が期待できる母性看護学実習の特徴を明らかにするとともに、学生の実践能力の向上を図る教育（講義・演習・実習）の実現に向けて、母性看護学実習における学内実習のさらなる改良をすすめることである。さらに今後、学生の経験知である実習経験録のデータと合わせて分析し、第2報として報告する予定である。

謝 辞

本研究に快くご協力くださいましたA大学学生の皆様に深く感謝致します。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

文 献

- 1) 日本看護系大学協議会：看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標, p.6 - 11, <https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> (2021.10.02 21:00アクセス)
- 2) 同上, p.27 - 29, (2021.10.02 21:00アクセス)
- 3) Keller.J.M.(2010)/鈴木克明監訳 (2012). 学習意欲をデザインする - ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン -. 北大路書房, 京都, 48.
- 4) 島田昌幸, 下中邦彦 (1979). 学習意欲の項. 新教育の辞典, 平凡社, 東京, 76-79.
- 5) 藤岡完治, 安酸史子, 村島さい子ほか (2001). 臨床実習における教育的関わり. 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版, 医学書院, 東京, 46-47.
- 6) 渡部幸子, 大澤豊子, 谷口友子 (2021). Covid-19禍における保健師学生の模擬健康教育の実践報告

- －市町村実習を臨地実習から学内実習に変更して－. 了徳寺大学研究紀要, 15, 49-59.
- 7) 安酸史子 (2015). 経験型実習教育: 看護師をはぐくむ理論と実践. 医学書院, 東京, 231.
 - 8) 曾山和彦 (2009). 参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察. 名城大学教育年報, 3, 13-20.
 - 9) Keller, J.M. (1987). Development and use of the ARCS model of motivational design. *Journal of Instructional Development*, 10(3), 2-10.
 - 10) 八巻耕也, 池田宏二, 上田久美子ほか (2017). 分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果. *薬学雑誌*, 137(10), 1285-1299.
 - 11) 同上
 - 12) 中村幸代, 宮内清子, 佐藤いずみほか (2018). 母性看護学における Team Based Learning(TBL) の導入に関する分析と評価. *母性衛生*, 58(4), 655-663.
 - 13) 中村恵子, 佐藤公美子 (2011). 看護教育における看護OSCE実施による教育効果－看護実践能力修得に必要な学習方法の理解と応用－主体的な学修姿勢の修得. *看護OSCE*, メヂカルフレンド社, 東京, 24-28.

2021年12月10日 受理
了徳寺大学研究紀要 第16号